

第31回Kozoom28 「干支 卯に因んだ 兎の話」

清水健二

今年令和5年の干支は「卯 — うさぎ」歳であるので、兎に因んで思い浮かぶことを書いてみようと思う。

干支の由来は紀元前の中国で、歴や時間を表す為に使われ始めたとされている。12年を周期にしたのは、木星の公転が12年であることから、天を12等分しそれを基に12支が起源とされたようである。1日を午前と午後を12等分して時を表したのも同様である。12支を動物に置き換えられたのは、庶民にわかり易くするために創り出されたという。

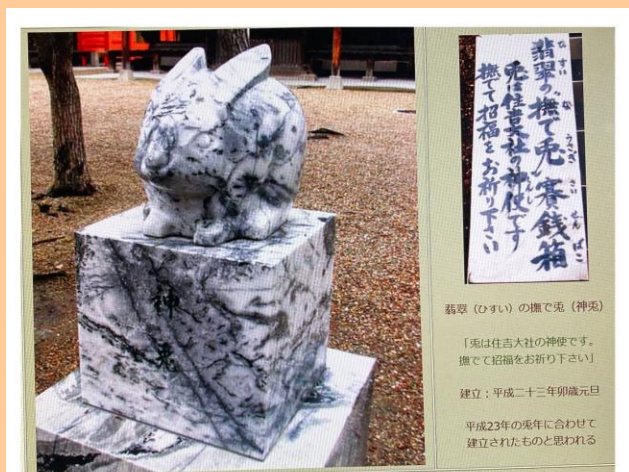
科学技術の発展が進んだ現代社会なのに、多くの人々は新しい年を迎えると、干支に示された動物のイメージを基にその年を占うのを好む人の多いのは、気持ちの切り替えを求める現われであろうか。今年も正月に神社へお参りして、おみくじを引き縁起を担ぐ人の多いのに驚く。読み終えた紙片を枯れ木に結わえ白い花を咲かせていた。公共団体や経済界でも新年の挨拶に、「今年は卯年で、兎のように飛躍し、向上を象徴する年である。また植物がよく成長する年でもある。大いに頑張ろう」と訓示される。別に「卯年」でなくてもよい。新年に向かって檄を飛ばす言葉が必要だからだろう。



みくじを愉しむ初詣

さて十二支に出てくる十二匹の動物はどうして選ばれたのか？はよく判らない。中国が原産だと思いが、日本の昔話では動物たちへ1月1日の朝、神さんのもとに駆けつけて来た順番にその年の大将にすると告げられて、最初に牛がやって来た。ところが牛の背中に乗ってきたネズミが飛び降りて1番をとったという。猫はネズミに騙されて1月2日に行けば良いと言われ、十二支から外れ、それ以来猫はネズミを追っかけるようになったという。これはかなりいい加減な話のように思える。

干支に出てくる兎は大抵白兎で、白い生き物は神様の使いとされ、白馬とか白狐、白蛇とかよく見聞するところである。特に兎は繁殖力が大で、豊穡を呼び、幸運をもたらす動物として、古代から親しまれていたようである。大阪の住吉大社は兎を崇め祀ってきているのはよく知られている。一昔前の平成23年の卯年、卯月、卯日に境内に翡翠材の「撫で兎」が建立され、手水舎には石材の兎像がある。したがって今年は参拝者が多く、撫で兎に願いを込めたようである。



住吉大社の「撫で兎」



住吉大社の「兎石像」

干支の兎と関係なく、世界の人々は兎についてどのくらい関心があるのか調べてみると、とても書き切れない程あるのを知った。つまり昔話の類から民話、寓話と各国夫々にあって人々の生活に溶け込んでいるのである。

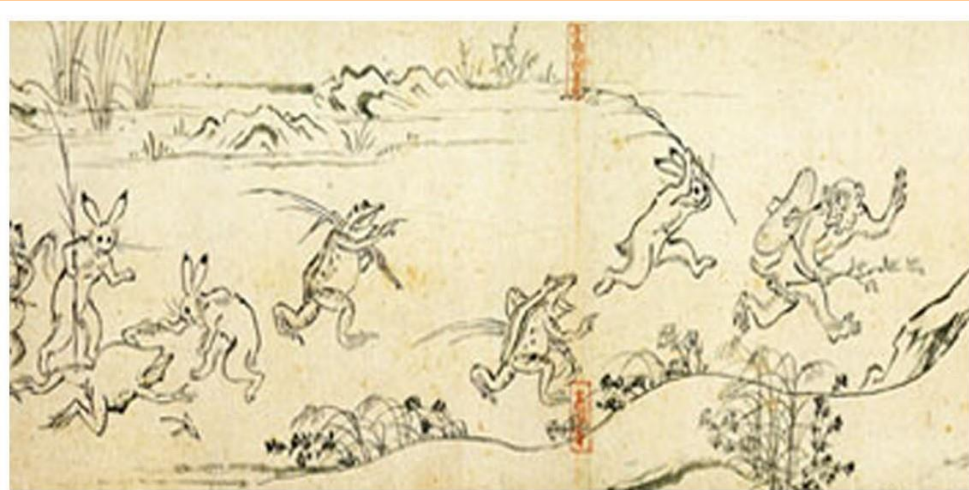
紀元前6世紀にトルコ出身のアイソーポスの寓話を集めたイソップ物語には、日本でもよく知られているが、

- ① 「兎と亀」 兎と亀が競争して、亀が勝ったという話。兎は亀には何時でも勝ると油断して負けを戒める物語。
- ② 「獅子と兎と鹿」 獅子が兎を捕まえたが、鹿の方が大きいので追いかけたものの取り逃がし、その間に兎に逃げられた両損の語。
- ③ カチカチ山と泥舟 兎とたぬきのよく知られた話 等々

アメリカの昔話では兎のしっぽが何故短いか。嘘つき兎と狼の話の中で、狼に追われて逃げている時に、罨にしっぽを挟まれ、短くなった童話。

日本でも古事記に出てくる「因幡の白兎」ワニザメに毛をむしられた兎が大国主命に救われる話。また今昔物語集に猿、狐、兎の3匹が老人に食べ物を進呈する約束から、兎は与えるものがなく自分の身を捧げた。捨て身の慈悲行に老人は帝釈天になり兎を月に送った話。

平安時代の後期作といわれ、京都梶尾・高山寺にある国宝の有名な「鳥獣人物戯画」は兎、猿、鹿、蛙を擬人化した絵巻物で、現在のアニメ画の原点とされているのは、ご承知の通りである。



国宝 鳥獸戯画絵巻から

興味のあるのは、月と兎の関係は、月のクレーター影が兎に見えることから、アジア各地でも古くから伝わっていて、ミャンマーの仏画やタイでも月の中に兎が描かれている。日本でも1400年も昔の飛鳥時代に「天寿国曼荼羅」に描かれていることから、様々な形で現在に至っている。兎は人々の生活の中に身近に存在していたことを示していたといえよう。

毎年私はその年の干支の動物を粘土で作し、焼き物(陶彫作品という)の土鈴を親しい、当たり歳の人達に差し上げてきた。何故か整った形の置物より下手な作品が個性的だと好まれる。丁度羊の年から始めたので後3年(龍、巳、午=馬)を作ると一回りするの、それまで生き長らえたいと思っている。他にも「兎と亀」、「月と兎」の10cm程度の小さい焼き物を作ったのでご笑覧ください。

令和5年1月 記



兎の土鈴



兎と月



兎と亀

